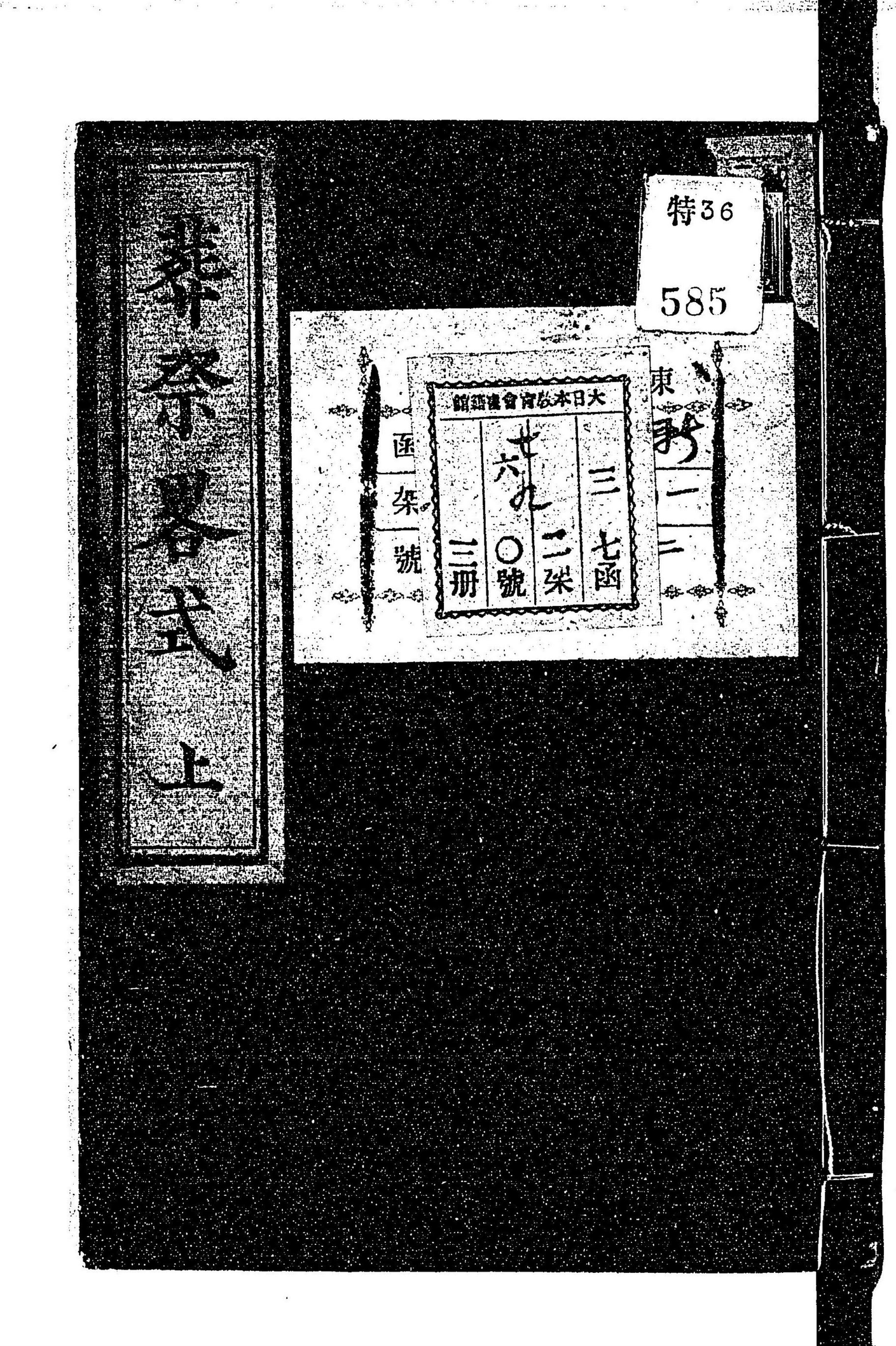


014338-001-2

特36-585

葬祭略式

黒住 宗篤/著

1冊(上20丁)

M12

ABB-0687

神道黒住派葬祭略式

明治十二年七月刻

特36
585

神道黒住派葬祭略式巻之上目次

一 終焉　舉哀
二 遺骸取扱
三 届書　通告
四 葬祭依頼
五 喪主
六 葬具調
七 葬地
八 納棺

特36
585

神道黒住派葬祭略式 巻之上 目次

一 終焉 挙哀
二 遺骸取扱
三 届書 通告
四 葬祭依頼
五 喪主
六 葬具調
七 葬地
八 納棺

東京帝国大学図書館蔵

九　死者の衣服
十　棺中扶物　充袋
十一　棺を蓋ふ
十二　棺安置墓誌をむく
十三　誄詞式
十四　遷寛式
十五　大舉〻載
十六　發葬式
十七　燎火

十八　行例
十九　埋葬式
二十　解除式　国　喪式見合下
二十一　靈祭式　右同
二十二　饗應
二十三　墓參
二十四　十日祭式
二十五　二十日同
二十六　五十日同

二十七　祭典式
二十八　百日祭
二十九　墓碑を建る
三十　正辰祭式
三十一　式年祭式
三十二　時祭式
三十三　例月祭
三十四　毎日拝

卷之中目次

一　斂具
二　葬具
三　喪服
四　祭具
五　圖式

卷之下目次

一　改式
二　服忌令
三　葬祭ニ関スル官令抜萃

目次了

神道黒住派葬祭畧式巻之上

管長　權少教正　黒住宗篤撰定
門人　權大講義　安藤直道原稿
同　大講義　千葉真明校正
同　根本真苗參考

疾ゝ病者あり醫療禁厭を尽ゝ難ゝ遂ゝ危篤くなゝで内外を静ゝ若ゝ遺言ゝ是ゝ記ゝ分かを有病を肝要ゝ べゝ既ゝ息絶ゝ今生の限りとふりたるを悲み其子又は至親の者食

を拔き哀戮を永訣を悼み情を訪さる僚友と
夫々の愁傷を述べ哀情を尽すを終焉と定めて
葬儀に従事ふべし
因に云ふ當家に物を苦しちなを義とされ
ども物を苦しらると悲しちハ別の事なり且父
母などの喪に逢ふ一生の悲み此上なき嘆
なればいろと哀情ふかく誠をり去るし
悲哀のなまり遂に物を苦しし身に病を生ず
るやうになりては却て不孝ふりなく勘弁す

べき事なり
○又神祭も死者を神と崇め尊ひ祭事を盛ん
にせんとして却て實を失ふ弊をきたしとお
ちず能く本に立ち帰りて恭敬哀戚の情を致す
を旨ばば誠の道に叶ふべし
一病者息絶て後ハ病牀のまゝ一日一夜の間を
是は勝れ拔けの時間をふべし遺體を動うさぬ顔に
是は遠ら時宜に従ふ
白布を覆ひ枕に向て卧しめ上座を拔と
きべし

但し枕邊に守刀或は鏡などおくべし偖屏風等を立廻らし机に洗米水塩等を供へ夜も燈火絶ざるべし

因て いふ香を焼き酸を盛るべしいふ事あり必死者に供へき物にあらず然れとも炎暑の時つねどもに臭氣の發ふんるきを防く料なれば枕邊後便宜の處に置べし

一病者命終らば地方の定規を慎み届書をいだすべし

但し親戚朋友の未だ来會ざる處へ告げ知らすべし

一葬祭の式法は本局教會所ホへ速に依頼し葬儀を行ふべし

但し最寄の該派の教導職に依頼し亦妨なし

因て去葬祭は現世永遠の別離なれば教導職篤く注意け喪家をして遺憾きなきやうべし

五

一喪主と嗣子よりべし若し子をくば近親の者代るべし

六

一靈柩棺櫛銘旗墓誌墓標諸葬具等も死者の身分に應じ造るべし

但し諸品製造の圖を下に記せしを見合すべし

七

一葬地は先塋の地を好むも若し新地をトせば必ず穢さる人なしして其地を掃ひ清め薦を敷て案上に盞を付し榊を立神坐を設け酒饌等を供へて祭るべし

掛卷恐き大地主神乃御前に某畏畏白佐久大神乃宇斯汝岐坐須此處乃下津岩根乃極美無窮に其官位名（官位の名字略）乃爲に奥津棄戸に營し止爲て荒草木根を祈掃ひ大石小石を堀平計奥津城に造留我爲に御酒御饌を備奉利乞祈白須狀を平良加聞食て弥遠長く災禍なく幸間守利賜へ畏畏白須

祀り訖りて酒饌を撤し其後墳を堀る小刀

棺坐棺さてゝ寸さ應して深く掘りて掛を填め
掛の四方を等固むべし
但し壙のくを穿ち掛を用ひざゝ妨げなし
一屍を棺さ斂る時ハ(夜を用)喪主以下遺骸さ一
禮し静さ取扱ふべし遺骸を沐浴をもさび布或
ち綿ふどを濕し汚垢を拭ひ散髪なれば剪み長
髪ふまで理むべし
一衣服ち明衣等の古制ハ是ち從ふべしさ
云さゝ亡者の遺言ハ是で免ゝ角ゝちべし然ら

ばば男女さゝ新衣さ帯を着しめ面さ覆ひを施
し卧さゝ食褥さ裏み棺さ斂ちを可さす(坐棺)
省さち食を
因云官位ハち人ちち明衣を着して大禮服
をち(衣冠ゝ之さ准ずる歟)棺内さ納め置ちゝ
ゝ稀さち有るゝし然れず平人さ通常禮服ち
羽織袴等を入置ゝ妨げなし
一棺さ収むる物ち脱歯臍緒其外生時さ手馴た
る器品を納むべし然ゝ金銀銅鐵の類ち入

うばうりば

但し棺内の動かぬ為に石灰或は敷藁等を大小の紙袋に入れ其數を大抵堅く填むべし

因に古膳鍋を高年の人たり共性命を存する者を枯乾めまい其形を失はず死亡する者を勿弱とらへ〻ト柝摩し其形を保さず故に遺遊失跡の者生死をトする足る云

一棺内に綿むべき物畢りなば除に蓋をふし釘

をしめ合目に澁青を塗り綱を掛け廻らべ

一墓誌を棺の上に置きよしりを備旭を掛け正寢に安置べし

一正寢に安置の上酒飯菓蔬魚藻菓子等を供へ

一斜礼し誄詞を白す

因に云誄詞は死者の功徳を稱する支那の唱おもゞに文字を訓して志奴備碁止と唱へ

と盤也と註あり也ば表久理碁止と唱可

らん歟

（何々命）乃霊乃御前尓官位苗字名告奉事寺
宇麻良尓閉食止白獅
此命（女此加能）何々年止云年乃何月何日尓生
出坐志何々乃年尓此家續（女奉良）比給比何
々年尓波何乃事尓伊曽之美坐志（或何官在何職ヲ補良礼）
（給比）何々年尓波何乃續寺立給比豆畏支人乃善
人乃伊曽志支人尓那在祁留然有婆百年乃
齢乎重豆呉竹乃世乃長人打竹乃世乃遠人止
名尓負坐寺事乎曽朝夕尓乞祈奉之尓是乃

年乃何月由阿都迦比脳美給比祢波都醫師等尓言て
議豆種々尓療須藥毋千萬尓晝夜不言心寺盡
志祈禱禁厭乃業尓毋丹誠乎抽傳天勞支勤志
尓天命乃限尓曲其可比奈久毋今年乃此月今
日乃何時尓霊波也立霧乃失去如久置露乃消
去我如空蟬乃此世乎離豆幽冥尓罷坐波比今
日乎利后波汝命乃言葉波不聞耶成奈乎惜支
加毋悔毋支加止家族等乃八尺乃嘆支尓泣美奴事
波見曽志給我如志如此豆在倍尓支在祢婆遺聘

奥都城所に葬奉留在魂波大神乃御許に帰上里坐旦此
家子永々久々恵美畏美畏美世誄白須給倍斗

かく誄詞畢りなば親族一同拝礼なるべし

但し發棺まで喪主親族の者等代る々々柩の
側に詣きつゝふべし

一　迁塊式は誄詞を大り親族拝礼の後霊代を
或は木板に名を記し或は大玉石或は祭の後鏡剣の類を迁す
鏡剣の類を迁す時は別に神床を設けずして代る代る迁す
は故中等以下は霊代を可
案上に据ゑ齋主進み拍手再拝還竟詞を申す（場合）

奏楽あらば常樂を用ゐべし

妙哉何某命濁穢を拔清き玉元九元九
乃心に飯利給ひ生々玉神乃心に任せ給ひ天
塊次是乃天奎不鎮利坐
微音にて三回唱ふべし

かく白しをはゝば喪主をはじめ親族一同拍手再
拝して迁竟式を行ふの後は斎竟を天代に迁り
荒竟は死体に留るの道理なれども発棺まで
死体の前に安置すべし酒饌を供へ夜は燈火を點ぜ
ん

一迁寛祭畢りなば徐に棺を大轝の上に載て
注連縄を引廻し其他發葬の装を整へ供物を供
へ玉串の案を〆設くべし
但し座敷にて棺を大轝に据ゑる如何の様な
きに其処にて結固置ふを發棺の時來りて〆
繁雑の患ひなく舁出すべき便よろし然れと
間狭の所なとハ便宜に従ふべし
一齋主柩前に進み拍手再拜して發葬の詞を白

今日乃夕日乃降る神葬仕奉る為留形平
かに安かに聞取給ふ羅坐年道乃間波不滞後
軽く心穏か出立坐世止恐美恐美白須
かく白しはりて喪主を始め親族等玉串を
献りて拝礼あるべし
因に玉串を献るは二等親まてにて
其余を懸ぬきを用ゐて妨なし（懸ぬきとハ榊を立ぬき
八重に切紙の垂を鈴々に長枝にかけて拝也）
一發葬の行装整ひなば門口に庭燎を焚くべし

一發華の行列を高卑によりて増減のありのを
〻〻其大概を左に記す

棗炬	幕　白杖
梟炬	幡　白枝
	灯燈　教尊職

従者	弓矢共　棗炬　榊　白旗
	弓矢共　棗炬　榊　赤旗

灯燈	樂人
灯燈	樂器　樂人
	樂人　灯燈　齊主

従者	棗炬　造花　榊　白旗
	棗炬　造花　榊　赤旗　灯燈　供

物擅	灯燈　銘旗
	棗炬　棗炬
	棗炬　棗炬　柩
	凳子　棗炬
	凳子　棗炬

墓標　灯燈　教導職　灯燈　奉

幣　灯燈　灯燈　喪主　従者　灯燈　親

族　灯燈　會葬人　以下従者并両具持

かくを記すべし銘旗のみにて白赤旗供物柩等を省き榊も一本を用ふべきか此等は身分相應に計ふへし

一葬地に於て棺の時間を考へ燎を焚き或は灯燈或は熟し薦を敷き置柩の到らば発子の上に据る案上に飯水魚等を適宜に供へ（奏楽なら此間用ゆ）齊主柩の前に進み拍手再拝して埋葬の詞を申す

乃命乃形見乃處に親族等（一名神主）参拝（美）葬奉留此乃

奥都城所ハ安久穂ノ鎮坐ニ止恐美恐美白須

次ニ齋主ヨリドメ喪主以下親族等各々玉串ヲ献リテ拝礼ヲ終リテ柩ヲ壙ニ下ロベシ此時喪主側ニ跪キ三度土ヲ覆ヒ瀆キテ夫丁四方ヨリ土ヲ覆ヒ少シ固メ墓誌ヲ埋メ又埋テ奥津城トシ其上ニ墓標ヲタテ垣ヲ結廻シ齋竹ヲ四隅ニ立テ注連縄ヲ曳渡シ墓前ニ榊ヲ立小案ニ飯水等ヲ供ヘテ喪主以下拝礼了リテ退散ロベシ

一喪主以下家ニ帰リ解除式ヲ行フニヲ先ツ門

内等ニ薦ヲ敷キ高案ヲ設ケ上ニ榊ヲ建テ祓式ヲ行フヘシ此式ヲハ祓具ヲ海河ニ流ロベシ是ヲ畧セハ門内ニテ鹽水ニヨリ身ヲ清ムヘシ

一家ニ帰リテ内外ヲ清メテ霊主ノ前ニ垂付ヲ榊ヲ立神饌ヲ供ヘ燈火ヲ點ジ霊重祭ヲ行フベシ

其詞ニ

何々命ノ神霊ノ前ニ白ス久百年ノ齢ヲ重ヒ

世乃永人止名負比坐寺事許朝夕乞祈
奉志花乃散如久紅葉乃移布如空蟬乃
此世乎離呂不百足八十乃隈道止遥祁文幽冥
爾罷坐奴波礼言乎須倍爲乎須倍无久惜美悲美都
顯世乃例志黙止敢有泥婆惟神奈留御捉
乃任爲神葬乃礼毋既久功竟奴留故爲此乃小
床乎清良爲榛比清米呂御飯御酒海河乃大臭
小臭野山乃甘菜辛菜種々乃菓子良取備布親
族等打集比呂御祭仕奉留狀乎平久閑食止

恐美恐美毋白須
かく白一畢て喪主以下一同神言を唱へ拜禮一
て供物を撤もべし一
二十三
一喪家も酒肴を以て吊客を饗もべかりず
二十三
一忌明に至りまてゝ日々墓參一神言を唱ふ其詞ゝ
二十四
吾父命墓前白久今日毋參來呂拜仕奉留狀乎聞食止恐美恐美毋
白須
一殁日より十日に至らば親戚故舊を集めて神
饌を供へ祭式を行ふべし一其十日祭の詞ゝ

二十五

何々命乃神灵乃前ニ白左久神避坐ス今日波十日（二十日三十日）
等ハ是ノ如シ止　古日ニ成奴留故ニ親族明友ニ集ヘ種々乃饌物ヲ
作備テ霊祭仕奉留形ヲ平久安久聞食ト恐美想美申

二十六

一十日祭以後ヲ二十日祭三十日祭四十日祭五十
日祭ト十日毎ニ神饌ヲ供ヘ祭式ヲ行ベ—
一忌明ニ至ル且家内ノ者浴潔—テ火ヲ新ニ霊
主ヲ霊舎ニ迁—納テ神饌ヲ供合祭式ヲ行ふべ
—其五十日祭の詞ハ
何々命乃神灵乃前ニ白ス神避坐ス今日波五十日止

二十七

古日ニ成奴留故ニ霊主ヲ霊舎ニ迁志代々乃祖等ヲ座ニ
奉テ朝夕ニ齋奉テ弥遠長ニ仕奉ル止為テ家族打集ヘ
種々乃饌物ヲ作備テ霊祭仕奉留形ヲ平久安久聞食テ子
孫乃八十連属ニ至マデ守テ幸ヒ賜ヒ恐美恐美白須
辞別テ遠祖代々乃祖等乃神灵乃前ニ白ス今日乃此日
何命乃灵主ヲ此乃霊舎ニ齋比迁志奉テ故ニ献留種乃月饌
物ヲ相嘗ニ聞食テ諸共ニ相宰テ豆奈比坐ス恐美恐美白須
一祭典式先豫メ清所ニ於テ尤の供物を調へ
神酒（瓶子壹斟）亦も堅く紙の口覆ふ子すト

餅（二重下に洗を布く）

洗米（飯赤飯等土器又は皿ふくべ）

野の物（二色三色洗を布く）

山の物（右に同じ）

海藻（同）

乾物（同）

時の菓（同）

製菓子（同下に笹或は常盤木の葉を布く）

魚（海河魚二臺に載せ）

鳥（若しくは玉子を用ふべし）

榊（二本赤を一本黒白を見合せべし用ふる榊は常盤木にべし）

時の花（花瓶一對に挿べし色数は定なし）

右何も高杯に載せ或は三方に載せ妨なし

是は品物を挙て迄も臺数に或は合せ或は分け適宜に増減すべし品々分に應じていお様好に任せべし

祭式

一齋主以下霊舎前に着座

一祓式　霊舎の側に高案を設け榊（金を付る時は之を）を立盛水を備へ置祓主祓殿の案前に進み祓詞を申す（前後とも再拝拍手以下一事毎に前後に再拝拍手をべし若し省くときは必ず）

一揖は（礼）了て盛水を以て四方を清めべし（盛水の行事了らば祓殿の案を取除くべし）

一齋主霊舎の扉を開く（簾なきべし捲き揭なきべし）

一齋主を初め祭に預る人各覆面して右の供物を傳供す（供物の順序は定まる齋主に仕たへし請渡しの度毎に拍手もべし）

一齋主祝詞を申す

一齋主先誦して各神言を白す

一齋主以下助祭の人々串を献じ拝礼（以下掛けて拝礼）

一撤饌（地用一旦退場して休息し再ひ前のごとく着座して撤しまつるべし此時は請渡しとも拍手）

一閉扉（音樂を用ゐる時は閉扉供撤拝礼の時ホコ用ゐべし）

右は一祭事の概略なり上に出す処の誄詞をも

ドめ皆此順次を以て時に當て増減もべき事な

り此五十日祭に至て全き祭事故畧式を載よく
夫々参考して執行ふべし
一百日祭を上に云る祭式に準ひ霊舎にて執行
すべし其詞に
何命の神霊の前に白左久神避坐志手刈來經行
月日の多由多布間無久早久毋百日止云日尓
毋成双留故尓親族打集比種々乃饌物乎作備
玉謹奥歌比毋仕奉留形乎平久安久聞食玉慕
比奉留真心乎阿波連上聞食諸聞給聞乎恐美

恐美毋白須
一百日祭に墓碑を建て墓標を除くべし
事故ありて後る一周祭の期を過べ
ば備奥兼城を造るべき形に土を圓形に築立其
廻りを瓦石にて九く築上げ（頂上芝草を植る
故也）墓碑を建べし常葉木にて可なり然
る時は墓碑を前に建べし委しく下に圖を記せ
り
一毎年正辰祭（亡者の本日を）は霊舎にて霊祭を

行ふべし其詞は別に祭場を設くるも妨ふし

何々命乃神靈乃前に白左久神避坐し其月其日に云期に成奴留故に種々乃饌物を古々

以下五十日祭に同し

辞別に遠祖代々乃祖等乃神靈乃前に白左久今日乃此日波何命乃神避坐し期に（二年四年に当る式年）の外は毎年四に云其月に当利奴留波と書べし

霊祭仕奉留に献古々以下五十日祭に同し

一式年祭は一周三年五年十年二十年三十年四

十年五十年百年二百年其祭式は霊主を霊舎より家内の清所に遷し大祭を行ふべし祭詞は百日祭に同し（辞別は略くべし）一周祭には（早久一周乃今日に当る成奴留）三年祭には（早久三年乃今日に当る成奴留）あり斟酌して作文べし

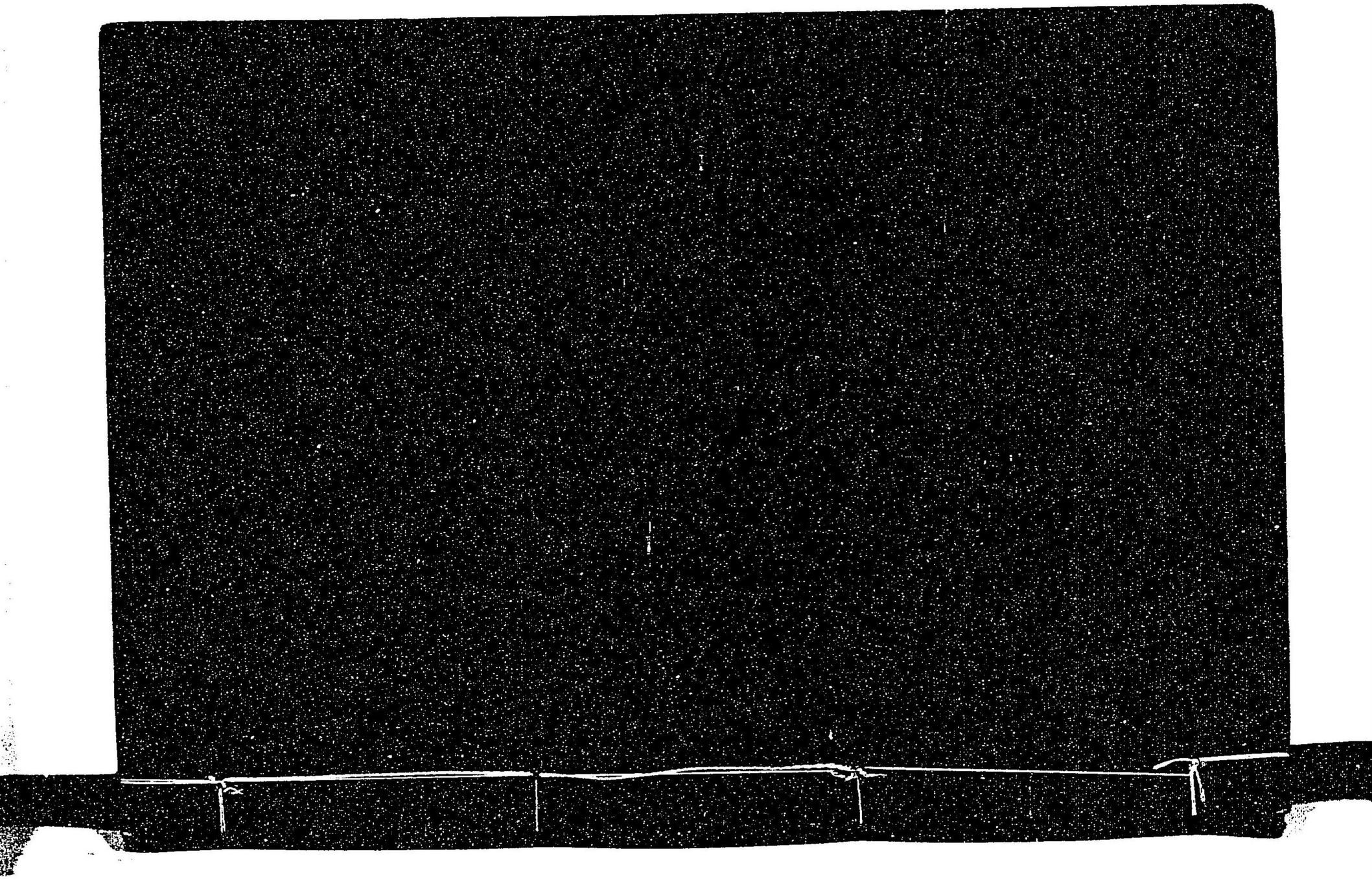
一時祭は毎年春秋二季（三四五月九十十一月の項に辰を表とび）に行ふ

先祖代々を合て祀る大祭なり其式は式年祭を参考べし其祭文は遠祖代々祖等に始て此霊舎に齋奉親族乃御霊乃御前に白久年毎乃

常例ノ隨此何月ノ何日ノ生日ノ足日ニ春ノ秋ノ祭
仕奉ムとけ〜めを書て余を上て做ふべし
一右時祭を執行ふ時ハ天照皇大神をもとめ奉
神棚ヘ神酒御饌を備へて祭るべし其詞ハ
此ノ家ノ神床ニ神籬立ル日ニ異ニ稱言竟奉
天照皇大神乎始奉リ某々神（信仰する神の御名）等
御前ニモ常物備奉利乞祈申左久今日某祖
先等ノ靈ノ前ニ春秋祭仕奉利家ノ守神止齋祀
支乎平ケ久安ケ久聞食ス大稜威乎添佐世

給ヒ玉幾千世迄ニ家ノ繁昌乎守良世賜閑ニ
畏美畏美申須
一例月祭ハ式年祭の外ふり祖先の神靈をも
ち靈舍殿の小祭（供物ハ省略して手軽く祭るべ
し時の花時の菓ハ供へを執行ふるなり）一月一日二月二日三月三
日四月四日五月五日六月六日七月七日八月八
日九月九日十月十日十一月十一日十二月十二
日ハ定むれとト事故ニ代換日を撰ひ一ヶ月
一度ハ必ず小祭をふるべし其詞ハ

遠祖代々祖乃神靈乃前尓白左久月毎乃例乃
隨々靈祭仕奉良止爲旦種々乃饌物乎作備謹
美敬比仕奉留形乎平久安久聞食旦此家内尓
禍事不令在子孫乃八十連屬尓至留乃今日乃
祭絶事無久懈事無久令奉仕給止恐美恐美
白須

一毎日祖先神靈をとゝめ靈舍合殿靈主併其祠
ゝ
此乃靈舍尓祀礼遠祖代々乃祖乃神靈乃前

世嗣乃裔孫某謹美敬比乞祈白左久子孫乃
継嗣家門立榮令米禍神乃枉戈不令在家業
勤乎志夜守日護尓守給比旦御祭弥遠永
仕閑奉良志給止畏美畏美白須